

SHOW HEY シネマルーム

Data

監督：ローラン・カンテ
原作：フランソワ・ベゴドー『教室へ』(早川書房刊)
出演：フランソワ・ベゴドー/フランク・ケイタ/エスメラルダ・ウエルタニ/ルイズ・グランペール/ラシエル・レグリエ/ウェイ・ホアン/アンリエット・カサルアンダ/ジャン＝ミシェール・シモネ/アンヌ・ラングロワ/ジュリー・アテノール

パリ20区、僕たちのクラス

2008年・フランス映画
配給/東京テアトル
128分

2010(平成22)年4月22日鑑賞

GAGA試写室

👁️👁️ みどころ

「荒れた教室」は日本でも大問題だが、そこにメスを入れるのはタブー？日教組との対決はイヤ？元教師で、『教室へ』の著者がみずから教師役で出演し、ホンモノの中学生24人を登場させた本作がカンヌ国際映画祭でパルムドールを受賞したのはなぜ？それを考えるとさすがフランス！さすがカンヌ！

「人種のるつぼ」、パリ20区の中学校は大変。そこで言葉を教え、国語を教えることの意義は？言葉と国語の劣化によるニッポン国の沈下を考えるために、そして民主主義とは？人権とは？を掘り下げるためにも本作は必見！

なぜパルムドールを？さすがカンヌ！

フランスが誇るカンヌ国際映画祭は毎年5月に開催されているが、2008年の第61回カンヌ国際映画祭でパルムドール(最高賞)を受賞したのが本作。審査委員長はアメリカを代表する俳優の1人、ショーン・ベンだ。『教室へ』の原作者であっても演技は素人の国語の先生フランソワ(フランソワ・ベゴドー)と地元パリ20区のフランソワーズ・ドルト中学校から選出された、これまた演技初経験となる15歳の中学生の男女24人との1年間の授業風景を描いた小さな映画である本作が、なぜそんな賞を？日本人の私たちがそれを理解するにはいくつかの前提事実の学習が必要だ。

まず第1に、パリ20区にある中学校は人種のるつぼだということ。フランスが積極的に移民を受け入れている国だということは知っていても、現実には外国人と接触することの少ない日本の義務教育の現場では、日本人がその問題点を理解するのは容易ではない。第2は、フランスは民主主義の国であり、政治の国だということ。戦後アメリカから与えら

れた民主主義をホントの民主主義だと理解（誤解？）している多くの日本人は、血を流したフランス革命によって自由・平等・博愛の民主主義を勝ち取ったフランス人の誇りを理解するのも容易ではない。日本では「60年安保」や「70年安保」の時、そして「ベトナム戦争反対」の時などはデモが相次いだ。政治への無関心が続く中、今やデモは珍しい。それに比べると、フランスでは何かコトあるとすぐにデモ。それだけ個人による政治的主張が強く、常に政治の季節にあるということだ。第3は教育のシステムの違い。ここで戦後の日本の教育委員会のあり方の問題や日教組の問題などを分析するわけにはいかないが、1つだけ指摘しておきたいのは、フランスでは中学校でも授業は対話方式だということ。先生が教壇から一方的に講義をしてコト足れりとする日本式の授業とは全く異なることが、本作をみればよくわかる。

そんな前提事実を検討しながら本作をみれば、フランソワがいかに真剣に24人の生徒たちと向き合っているかがよくわかる。そして、真剣に向き合うということは、同時にリスクも負担するという。「でもしか先生」と揶揄される教師が多い日本に、フランソワのような教師がいるの？フランスでも「荒れた教室」は日本と同様、いやそれ以上かもしれないが、そんな中パリ20区にこんな真剣勝負、直球勝負をする中学教師がいたことにビックリ！本作がパルムドールを受賞したのは、きっとショーン・ベンをはじめとする審査員や観客たちが一斉にそれに驚くとともに、その問題提起に愕然としたためだ。

「荒れた教室」、日仏比較

私はいくつかの大学の法学部での講義と法科大学院での講義を行った経験があるが、日本では学生や大学院生の授業への集中度は大学のレベルによって大きく違う。それに対して過去4回行った中国の大学での講義で実感したのは、中国人学生の講師に対する集中度は抜群で日本とは大違いということだ。

他方、私はニュースでしか知らないが、日本の公立中学校では私語や授業中のケータイは当たり前で、その荒れようはすごいらしい。それに比べると、本作が描く24人の中学生たちは始業ベルから着席するまで15分もかかったり、私語をやめなかったり、帽子を脱がなかったりと問題は多いが、ケータイを扱っている生徒がいないところは嬉しい。また、フランソワが自分の名前を紙に書いて机の上に立てなさいと要求すると、生徒たちはしぶしぶながらもそれに従っているから嬉しい。私は日本の公立中学校における「荒れた教室」の実態を十分把握していないから正確な日仏比較はできないが、その荒れようは人種のるつぼであるパリ20区の方が、日本よりマシ？

問題児は誰？その処置は？

問題児はどこにでもいるものだが、クラス最大の問題児はスレイマン（フランク・ケイタ）という大柄な黒人の男子生徒。映画の中で語られるサッカーの話は私にはチンプンカ

ンブンだし、同じ黒人でもフランス領アンティル諸島出身のカルルとスレイマンとでは価値観が全然違うようだが、その違いの理解は到底無理。近時の日本では「キレル」若者が増えているらしいが、スレイマンは成績が良くないうえ、時々キレルから大変。

本作の重要なエピソードは、ある論争の中でキれてしまったスレイマンがフランソワの許可を得ないまま教室を出て行ったばかりか、その時のはずみでバッグを隣の女生徒クンバ(ラシェル・レグリエ)の顔に直撃させ血を流すケガをさせたこと。このため、校長を責任者とする懲罰委員会を開催せざるをえなくなり、スレイマンは母親と共に呼び出されたが、その結論は？その結論は予想どおりのものだったが、興味深いのは懲罰委員会を開くかどうかについての先生たちの議論と、懲罰委員会の運営の仕方。

日本ではこういう事態になると「コトなかれ主義」が横行し、集団無責任体制になるのがオチだが、フランスは全然違う。その徹底した議論に注目！

成績会議に生徒代表も参加！その効用は？

何ゴトにも民主主義が徹底しているフランスでは、生徒たちの「成績会議」にも生徒代表が出席するというから恐れ入る。今生徒代表として出席しているのは、小生意気そうな女生徒エスメラルダ(エスメラルダ・ウエルタニ)とルーズ(ルーズ・グランパール)の2人。校長を中心として先生たちが真面目に1人ずつの成績について討論しているのに、彼女たちはお菓子を食ヒソヒソ話をしながらそれを傍聴しているからその態度の悪さにビックリ。とはいっても、フランスではどんな態度で会議に臨み、人の話を聞かかも自由？

ちなみに、民主主義ではプライバシーの尊重と表現・報道の自由がよく対立するが、成績会議での議論はどこまでプライバシーを尊重すべき？それともどこまで表現・報道の自由を認めるべき？フランソワの授業でそれが大問題になったから、私はビックリ。つまり、スレイマンの成績について成績会議でフランソワが述べた意見を聞いていたエスメラルダとルーズが、それをクラスの生徒たちに勝手に公表したわけだ。フランソワがスレイマンの成績について「能力の限界」という言葉を使ったのは事実だが、それが誤解されたり誇張されたりすれば大変なことに。フランソワは一貫して言葉の大切さを生徒たちに教えてきたはずだが、「能力の限界」という言葉が一人歩きすると、そんな発言をしたフランソワはヤバい？

教師と生徒たちの全面対決の原因は？その行方は？

私は弁護士として、また映画評論家として言葉の大切さを常に意識しているから、言葉にこだわりを持っているフランソワの姿勢には大いに共感を覚える。もっとも、私はそのことと「汚い言葉を使うな！」ということは別問題として考えているから、必要に応じて(?)汚い言葉も多用している。それは「世界のキタノ」こと北野武監督も同じ？

それはともかく、本作最大のエピソードとなるフランソワと生徒たちとの全面対決が発

生じた原因は、フランソワが使った「ペタス」という言葉。フランソワは成績会議におけるエスメラルダとルイズのふざけた態度を「ペタス（下品な女）のすることだ」と表現したのだが、ペタスには「娼婦」という別の意味があるため、エスメラルダとルイズは自分たちが「娼婦」と罵倒されたと過剰反応したわけだ。こうなると、口の達者な女の子たちの噂の伝播は早く、たちまち教育指導主宰CPE（ジュリー・アテノール）の耳にも入ることに。

美しいフランス語の単語と文法にとことんこだわっているフランソワが、出来の悪い生徒たちからこんなあげ足とりをされたのではたまったものではない。そのためさすがのフランソワもキレそうになったが、さて教師と生徒たちの全面对決の行方は？

ラストシーンは何を物語る？

フランソワのクラスはスレイマンを退学させるなどさまざまな問題を発生させながら、最後の授業を迎えることに。生徒たちとの「対話」を願ったフランソワが当初試みたのが、生徒たちに自己紹介文を書かせるということ。そんなフランソワの要請を受け、たどたどしくても何とか自分の言葉で自己紹介しようとする生徒や、逆に「何も語ることはない！」と自己紹介自体を拒否する生徒などさまざまな姿が登場する。成績優秀な中国人男子生徒ウェイ（ウェイ・ホアン）の自己紹介はさすがで、うまく人と話せない自分のことをよく表現していた。

フランソワの生徒たちへの最後のプレゼントは、一人一人へそんな自己紹介文を綴った冊子を配ること。写真付きで配られた冊子に多くの生徒たちは大喜びしながら教室を出ていったが、最後に残った女子生徒アンリエット（アンリエット・カサルアンダ）は「この1年間何も学んでいない」と告白。それに対して啞然とするフランソワの心中は？

本作がパルムドールを受賞するほど高い評価を受けた理由は、教訓めいたことを何一つ述べていないこと。つまり問題を問題として真正面から示しているからだ。はっきりいえば、フランソワの1年間にわたる涙ぐましい努力にもかかわらず、根本的な問題は何ひとつ解決していない。しかし、あえてプラス面を探せば、最終の授業で一人一人の生徒が一年間学んできたことの成果を発表したり、エスメラルダがプラトンの『国家論』について論じたりしたこと。

そこに希望を託すしか仕方はないのだが、私がぞっとしたのは生徒たちが出ていった後の教室の姿。私が小学校を卒業した時代は、全員で机とイスをきちんと整理整頓したものだが、パリ20区にある「人種のるつぼ」の中学校においては、生徒たちが立ち去った後の教室内の机とイスは？それを静かに映し出すだけのラストシーンは何を物語っているの？それについての私の解釈はさておき、あなたの解釈は？

2010（平成22）年4月23日記